

椎名麟三全集

8

椎名麟三全集

8

小説
8

冬
樹
社

椎名麟三全集 8

昭和四十六年九月三十日初版第一刷発行

著 者―椎名麟三

発行者―高橋直良

発行所―冬樹社 東京都千代田区神田神保町二―一八

電話東京二六四―〇三四六 振替東京七七五七

印刷所―三容堂印刷株式会社

製本所―一重製本株式会社

装幀者―枡折久美子

写 真―林忠彦

定 価―二〇〇〇円

© Rinzo Shima 1971

0391-02008-5190

第八卷目次

母の恋文	3
夏休み	21
避暑地	47
エスカレーター	69
自由ということ	99
断崖の上で	119
寒暖計	221
小さな町の夫人たち	241
仲間	275
全断面掘鑿	295
良太の計画	321

母の恋文

1

私は、その大病院のベッドへ寝ながら、一通の分厚い手紙をやっと読みおえた。私は、少しばかり興奮していた。二十年あまり前だが、私の結婚を申込んだことのある女からの手紙だったからだ。しかもその手紙にはあまい文句が一杯書き込まれていたのだ。私は、手紙をおいて胸を押えた。心臓のときどき痛んで息もできなくなる病気で入院していて、いまでもそのかい発作が起ったからである。

「何が何やらさっぱりわからない」と私は、相変らず胸を押えながら呟いた。「おれ自身、生きているのやら死んでいるのやらさえわからないんだから、無理もないけどな」

ヘリコプターが、その病院の上空へ、今日もまたやって来ていた。パタパタパタと、怪鳥の羽根のように空気を打ちながらだ。そしてそれは、今日もこの病院の上を旋回しはじめているにちがいがなかった。

私は、自分自身にたずねた。

「何のために、あれは、毎日こんなところへ来て旋回しているんだろう？」

そして私は、その問いに対して自分自身へ腹を立てながら答えてやった。

「そんなこと、おれが知るわけはないじゃないか」

窓の外は、九月のくもった空だった。その空に低く黒々と鉄の枠のような機体がうかんでいた。その機体の先に、シャボン玉のような透明な操縦室がついており、そのなかには、粘土を小さくまるめてひとひねりしたような操縦士の姿も見えた。私は、そのヘリコプターは、どうしてここへよくとんで来るのか、そしてここへ来るとどうしてこの病院の上を旋回するのか、さっぱりわからなかったのである。

看護婦さんが、昼の検温に入ってきた。私は、空の方を眼でさしながら彼女へたずねた。

「ヘリコプター、毎日ここへ来ては旋回しているようですけど、……何か、わけがあるんですか？」

だが、看護婦さんは、チラッと反射的に窓の方へ眼をやりはしたが、すぐ体温計を私にわたしながら、事務的に答えた。

「そうですか？」

もちろん看護婦さんには、ヘリコプターなんか何の関係もないことだった。彼女は、次の部屋へ体温計をわたすために、部屋を急いで出て行った。私は、ベッドの上で、左の脇の下へ体温計をはさみながら静かに横になった。その私は、何かから手ひどくだまされてでもいるような妙な気がしはじめていたのだ。それは生きているということについてだけでなく、死ぬということについてもそうであって、いわばほんとは死ななくてもいいのにだまされて死んで行くのだという感じなのである。全くはっきり理由をあげて説明をすることはできないのだが、世のなか全体から自分の一番大切な真実についてだまされているという感じなのであった。

先刻の体温計をおいて行った看護婦さんが今度はとりに入ってきて、体温計の水銀の高さをしらべ、手首に指をおいて脈をしらべると、もう身体を出口の方へ向けながら事務的にたずねた。

「お変わりありませんね」

私は、お変りがあってもあるとは答えられないだろうという気がしながら答える。

「はい、ありません」

そして私は、どうして先刻二、三分くらいの発作であったが、また胸のひどく痛んだことを告げなかったのだろうかと考えているのである。よほどわるいことをしているらしく、どうも私という人間は、この世の人々へ遠慮しすぎているらしいのだ。

もちろん私は、自分の病気が、心筋梗塞症であるということを知っていた。最初、家で猛烈に胸がいたくなって、医者を呼んだのだが、全くその胸の痛さはこの世のどんな悲惨に対してもこんなふうには胸を痛めはしなかったろうと思われるほどひどいものであったのである。呼ばれた医者は心臓の病気にくわしいといわれている私の知合だったが、彼は、私の病気を見てつよいショックを受けたようだった。彼は、ひどくうろたえて、茶碗をこぼし、いろんな大量の注射を次から次に打ち、今晚にもダメかも知れないというようなことさえ口走ったのだった。心筋梗塞という病名は、そのとき彼の口にしたものだったのだ。しかし私には、そんな病名は、全くの初耳だったのである。

医者がいますぐにでも入院した方がいいといつて帰ると、私は、家人にいつけて、本棚にある医学の専門書をもって来させたのだ。そして私は、その本にその病名を見つけ、その説明をよんでなるほど重い病気なのだという得心がいったのである。心臓の冠状動脈のつまる病気であったからだ。そして専門書は、いかにも専門書らしく、その病気の予後は大抵不良で、たとえすぐ死なないにしても、二、三年以内に半数以上は

死んでしまうという、私にははなはだ氣に入らない、余計な統計表までかかげてあったのである。私は、あわてて思いつくままの医学に関係のある本を、物入れにつみ上げてある本のなかまでさがさせた。どの医書にもその病氣はきつと快癒するという保証は、記載してなかった。ただ、最後の民間療法の本にはじめてそれを見たのである。その本のなかには、心筋梗塞は重い病気で、手の施しようがないが、ただドクダミを煎じてのめばふしぎなほどピタリとなおるというくだりを読んだのだ。しかし私は、その希望の宣言を読んで、どうやらはじめて自分の死の現実を知ったようなのだ。すると腹のなかが氷のように冷たくなって行くのを覚えたのである。

だが、その氷のような冷たさは、私の全身にしみわたることはできなかったのだ。ひどく鈍感で人生の真実なんていうものについては永久に知ることのない、肥厚して白痴めいた自分が私のなかにあって、私の折角の覚悟に対してこうゆるめてしまうのだ。

「そういったって、まだ、きっと、ホントウには駄目じゃないにちがいないんだ。見立てちがいということもあるからな」

私は、このようにホントウの事実を避ける自分を情ないと思うばかりか、そんな白痴面をした自分に、どうしてかかえって恐怖さえ感じられて来るのだ。しかしそれでいてどうしようもないのである。入院してからも、途方にくれたようにこう考えていたのだ。

「結局、おれという人間は、死ぬときだってそれとわからずに、ネズミがネコの鼻の先をかじっているというような、愚にもつかない夢ばかり見て死んで行くにちがいないんだ」

そして入院して十日ほどたってからであった。私は、私の故郷に近い明石というところから、あの二十年あまり前に求婚したことのある、横田和子という女から、手紙を受取ったのである。しかもその女は、私の

片時も忘れなかった、という嘘になるが、生れてはじめて私の求婚した女として、いつでも私の心の奥から引き出せる思い出の女なのだ。

私が、小説へ関心を持ちはじめたのは、三十歳近くなってからだが、二十歳前後のころは、労働者として共産党の運動に加っていたのである。間もなく検査に会い、一年ばかり警察の留置場をたらいまわしになっていた。そして彼女に会ったのは、神戸の菊水橋の警察署であったが、いまとなつては、あのときどうして彼女に夢中になることができたのか、私にはさっぱりわからないのである。何故なら、彼女が私の監房から二、三室をへだてた、留置場のなかで一番入口の傍にある監房へ入れられたとき、私は彼女の顔はもちろん、彼女の身の上についてはさっぱり知らなかったからだ。ただ私の知っていたのはその声だけだった。しかしその声は、たしかに私の心のなかの何かを打ったにちがいない。私は、彼女が同志らしいということを知ると、看守の眼をかすめて、彼女の部屋の鉄網の窓へしのびよった。そして部屋のなかにひとりしょんぼり坐っている女へ声をかけたのだ。

「おれは党のもんやけど、あんたの細胞はどこや」

すると女は看守を警戒しながら、窓へ近付いて来てこういったのである。

「わたし、明石の郵便局です……共青です」

眼の大きな丸顔の女で、その頬が暗い監房のなかにうすく光っているようだった。私は、ドキンとした。異常に美しいものを見た気がしたからだ。そしてその晩一晩中、私の胸は痛みつづけたのである。私は黨員なので、何年たっても出られないかも知れなかったが、彼女は、共青の同盟員なので、すぐ釈放されるということは私にはわかっていたからである。そして私は、翌日、ふたたび看守から発見されればひどい目に会う危険をおかして、彼女の監房へ近寄ると、おそらく不眠で真赤な眼をしながら、彼女へ結婚を申込んだの

であった。だが、彼女は、とんでもないところで、とんでもない申込みを受けて、ただびっくりしているだけで、何の答えも出ないようだった。もちろんこんな突然さでは答えようもないことぐらい私にはわかっていて。で私は、彼女へ、釈放されて外へ出たら、よく考えて是非諾否の返事をもらいたいと頼んだのだ。そして彼女は、案の定、四、五日で留置場を出て行ったのだが、残念にも遂に彼女からは、何の返事ももらえなかったのである。しかし私は、監房のうす闇にういていた彼女のホンノリ光っている丸い顔を思いうかべながら、ホントウに愛している思いとともに、それも当然だという気がしていたのであった。

この小さな事件は、その後二十年あまりたった今日まで、明石という名を聞けば、私にチャンと思ひ出されているようだし、一昨年明石へ行ったときは、わざわざもうわかるはずもない彼女の消息をしらべさえているのである。しかし彼女の住所はわかったのだ。その彼女は、明石から西へ下った町にいて、電車につとめている人に、あれがそうだと教えてもらったことさえあったのだ。そのとき彼女は、小さな食堂の店先で、氷を機械でガリガリ削っていたのである。その彼女は、もう私にとっては全く見覚えもない見知らぬ人間だったのだ。何故なら彼女は、当然四十半ばをすぎている女となつて、小太りに太っていただけでなく、どこか世の荒波を凌いで来たといった勝負な感じにあふれていたのであった。

私は、もう一度ベッドから手をのばして、その分厚い手紙をとり上げた。しかしその手紙は、全くどこか心の若ささえ感じられる達筆な字で、氷をガリガリ削っていた彼女の字とは思われないものだった。私は思わず呟いた。

「郵便局へつとめていたことのあるせいなんだ」

手紙は、私の病気を私の親戚のものから聞いて知ったと書き出してあった。私は、この二月に倒れたときも、姫路の親戚へは知らなかったのだが、今度は九月に行くといつてあっただけに、どうしても病気を知

らずにはおられなかったのである。そして彼女は、その親戚から聞いて知ったというのだった。

私は、一度は読み通したその手紙を、ふたたびとびとびに読み直して見た。今度は、最初読んだときより、感銘が強くなって、「氣を強くして働いてはいますが、ときどきひとり寝の淋しさを味わずにはおられません」とか「いつも心の隅に空虚なものがあるんです」とか、「あなたのことをときどき思い出します」とかいう人さわがせな文句が実際より一倍半ほど大きく私に見えて来たのである。しかも私は、危険だから絶対興奮してはならないといいわたされている病人だったのだった。

2

ある日、主治医が病室へやって来ると、いいにくいことをいわなければならないといったような神妙な顔でいった。

「やはり、心筋梗塞です。心臓の中隔の部分が梗塞しているのです」

「やはりそうでしたか」と私は平気な声で答えた。

しかし腹の底は、またかなり冷たくなっていた。街の医者宣告と、いろいろ調べてくれた病院の宣告とは、結局同じだったのだ。しかもそのとき以上に、いろいろな身体的条件が、思ったよりわるかった。医者は、そのいろんな検査の結果を数字にして教えてくれた。それからどことなくささやかなさの感じられるなぐさめを残して医者は去って行ったのである。私は、私でなくその医者の方がうすくなったように感じられたほどだった。

「さて」と私は、ベッドの上で明るい窓を眺めながら考えた。「なるほどおれの場合は、こういうふうにし

て具合よく死んで行くんだな」

恐ろしかったからである。しかし私は、また、どうしたわけかホントウには恐ろしくなることはできなかったのだ。私の心のどこかに、たしかに白痴化して鈍感になっている部分があって、私の全体で恐ろしくなることをさまたげているにちがいないのだ。何故なら私は、医者からそんな宣告を受けて恐ろしくなっているながら、上京して来た横田和子のこの病院へ見舞いに来るというのを、浮々と待ってもいたからであった。

二、三日前ハガキで、和子は、姪の結婚式にはじめて上京するが、そのついでにお見舞いにも上るという意味のことをいつて来ていたからだ。しかもその文面は、結婚式は私に会いに来るための口実だと察せられるようにさえ書かれていたのである。で、私は、間に合うかどうかわからなかったが、病院へわかりやすく来る地図や、病室の番号を書いておくってやった。しかもエレベーターの乗り方まで書きそえてだ。何故ならその病院のエレベーターは自動式で、田舎者の彼女にはわかるまいと思つたからだった。その私は、明石へ行って、氷をガリガリ削っている彼女の姿を見たとき、声をかけておけばよかったという気さえしていたのであった。何故なら二十何年ぶりであう最初のぎこちなさは、とりのぞいておくことはできたはずだからだ。

そして私は、その医者 of 宣告のあつた後も、毎日いろんな検査にひき出された。看護婦さんにつれられて長い長い渡り廊下を歩かされて行くときは、あの裁判所の長いわたり廊下を思い出し、もう人影も少ない心電図やレントゲンの部屋の前で、ベンチに腰を下しながら順番を待っているときなど、何ヵ月も神戸裁判所の構内にある検事局の検事調査や予審判事の調査の前などのベンチで、編笠に手錠付で待たされていたときと、同じ雰囲気を感じざるを得なかった。とにかく私はしらべられるのだからだ。

だが、ある日、代謝機能を調べられてからだだった。長い廊下づたいに自分の病棟へかえって来て、エレベ

―ターで自分の部屋の前まで来ると、ひとりの四十年輩の和服姿の女が立っているのだった。私は、心にハッとした。それからドアをあけながらずねた。

「横田和子さん……ですか？」

すると女は、関西弁で答えた。

「ええ、ええ、……ほんまに、びっくりしてしもた」

私は、彼女は何をびっくりしてしまったのか、わけがわからなかった。でも私は、嬉しがらなければならぬ気がして部屋のなかを指さすようにしていった。

「独房の倍ぐらいのひろさやろ？」

和子も、堅苦しそうふうもなく、あたりを見廻しながら、少しばかり上気した顔で答えた。

「ええとこでんなあ」

その言葉の調子は、風光明媚なところにある観光ホテルにでも来たというような浮々したところがあった。で、私は、挨拶抜きで、私のおかれている現実を示すために、窓の下を指さしながら彼女へたずねた。

「あの家、何だか知っている？」

それは、五階建の病棟と病棟との間の中庭にある小ぢんまりした一軒の和風の平家だった。四階の私の病室の高さからは、実際以上に低く見える白い塀が、その家を四角にかこんでいて、潤葉樹の植込みも、なかなか手入れが行きとどいているというふうだった。そして見下される黒瓦の屋根は、ある官僚めいた重々しさがあって、何とか大先生の旧居というような感じさえた。だが、和子はそんなものには何の興味も感じなかった様子で、考えようもしないで答えた。

「わかりまへん、わてには」

で私は、重々しげに答えた。

「あれは靈安堂といってな、死んだひとをおいておくところだよ。そんなとき、夜なんかロウソクの明りがボンヤリもれているよ」

すると、病院へ入ったからって、必ずなおって帰るとはかぎらないのだという証明として、あの家があるところにあるのだという言葉がもっともらしく私の心をすぎて行つた。だが、私は、どこか妙なところがあるにしろ、とにかくはなやいだ声でいつていたのである。

「ぼくは、一昨年、速くから君を見たことがあるんだよ」

「知つてま」と和子はいった。「山陽さんの吉成はんから聞いたもん」

山陽さんというのは、私の昔つとめていたことのある山陽電鉄のことである。だが、私は、その名の男を知らなかったのだ。私たちは、当然のように検査された当時のことに話を戻して行つた。それしか二人の共通の記憶がなかったからだ。しかしそれでさえ、彼女の上げる名前は私に思い出せず、私のあげる名前は、姿や恰好や役割などをいくら説明してみても、彼女に思い出してもらえなかったのだ。いいかえればおたがい親しい共通の人の名は、ひとりもなかったといつてよかつたのである。その私たちは、二、三日はチラツと留置場でふれあつたことのあるだけで、生れてから四十半ばすぎた現在まで、全くおたがいにおたがいを知らずに、別々の生活をおくつて来た人間であるといふことをいやでも知らずにはおられなかつたのである。しかし私は、そんな事情から白々しい隙ができそうになると、それをかばつて、バカの一つ覚えのように何度もこう繰り返しているばかりだつたのだ。

「しかしあんたは、いまだに美しい」

もちろん彼女の和服の胸元から見える肌は、まだ若々しそつた。顔も思つたよりしわはよつていなか